

三重の里ぐらしフォーラム開催記録

場所 松阪市飯南産業文化センター

日時 平成22年3月13日(土)

午後1時30分～午後4時40分

◇主催：松阪市、三重県 ◇協力：松阪市山里の未来研究会

◇参加者：70名（講師、事例発表者、コーディネーター別）

◇スタッフ：県担当者7名、松阪市職員（政策課 岡本、北河）

三重の里ぐらしフォーラムを開催しました概要については下記のとおりです。

記

◇司会：松阪市山里の未来研究会 床呂さや子

1 挨拶（農山漁村室 久保室長）

平素から元気で魅力ある農山漁村づくりにあたり、ご尽力、ご協力を賜りありがとうございます。

ここ最近、都市住民の間では、癒しや安らぎあるいは生きがいを求め、農山漁村での交流や移住を希望する方が増えている。新たな風となる移住者と地域住民との協働が進めば、農山漁村の再生につながると思われる。

今回の「三重の里ぐらしフォーラム」では、研究者の方や実際に移住された方々のお話をお聞きし、地元の「里」を見つめなおすとともに、これからの「里づくり」のヒントをつかんでいただきたい。

2 基調講演（(財)日本交通公社 研究調査部長 梅川智也氏）

これまでの観光は発地型観光であったが、旅行経験が増加し価値観が多様化した旅行者に対応するためには、地域が自らの資源を活用し主体的に商品化して情報発信する地域発(着地型)観光が大切であるとの認識が広がってきた。

これらを実現していくためには、地域力を総動員して、地域資源を発掘し磨き上げ外部の人との交流を行うことで、地域住民の自信と誇りを感じる。それが、地域住民にとって生き甲斐となり、地域が元気になる。

元気な地域の共通点としては、①地域ならではの「本物体験」を提供、②地域人材を集めて観光とまちづくりを一体的に取り組む、③付加価値を高めて地域を商品化、④波及効果・相乗効果の高い地域経営、⑤地域を効果的に売っていくための体制がある。

地域主体の観光を展開していくためには、①担い手やリーダー等の必要な人材の発掘と育成、②新しい公の役割の重要性や独自財源を得るしくみ等観光まちづくり

に一体的に取り組むための組織づくりが必要である。

3 事例発表…コーディネーター：松阪市山里の未来研究会 岩男安展

和歌山県那智勝浦町 色川地域振興推進委員会 会長 原 和男氏

色川地域は温暖・多雨で急傾斜地や棚田がある。以前は林業や鉱業で栄えたが、高度成長を経て人口が1/6に減少し、高齢化率が約5割になっている。234世帯443人が在住し、うち、Iターンは62世帯161人(人口の約3割)が占めている。

移住者を受け入れるきっかけとなったのは、有機農業を志すグループ(耕人舎)が、移住先を探して訪ね歩き、色川に来訪したことから始まる。

その当時の色川地域は過疎対策を真剣に考える動きが一部あるものの、集落の消滅や小学校の廃校など深刻な課題があっても元気な地域であった。

2年間行き来する中で信頼関係を醸成した後、住居・農地を紹介し定住へと段階的に対応を行ってきた。

その後、マスコミ取材や都市住民への呼びかけにより、多くの見学者、研修生等を受け入れる等人が人を呼んでいった。地域の雰囲気が良いということは、人に魅力があるため、これが移住者増加となった原点である。

移住が進むにつれ、地域の中で不安感と警戒感が募り始めたことから、移住に対する地域としての受け入れ窓口の必要性が生じたことから、1991年に色川地域振興推進委員会が発足し、活性化活動の一環として取り組むこととなった。地域が丸となって取り組むことで行政の支援も少しずつ始まっていった。

現在の最大の課題は住宅の確保である。最初、家主に売って欲しいと行政が言っても住宅確保は難しい。家主の親戚等に事情を説明し、その人から家主に説得してもらうことで住宅確保ができた。つまり、住宅確保は地元の人が人を入れて地域をよくしたいという気持ちにならないと進まない。

また、「地域らしさ」は、地域のこれまでの流れを受け継ぎ、地域の今の元気を取り入れ組み合わせたものである。そんな「地域らしさ」を担う仲間探しと、これまで守り受け継がれてきた「地域らしさ(色川らしさ)」を後世に受け継いでいくために、地域住民と移住者が一体感を持ってどのように取り組むかという課題にも取り組んでいる。

仕事を用意していれば過疎にならないと考えられがちだが、仕事も人がおこすことで地域のブランド化に繋がることもある。

今、見直されるべき村の暮らしは、自然や人との繋がりを持つことが真の豊かさになり、今こそ自分たちの暮らしへの自信・誇りを取り戻すことで、人を引きつける流れに繋がっていく。

集落再生の原動力は、地域の誇りと一体感を持つことであり、村人の本気度がどこまであるかによる。

津市白山町 農家民宿・レストラン経営 足立 慶双氏

20年前に留学し、4年前に津市白山町の空き家を購入して最初は行き来していた。母の介護もあり、2年前に仕事を辞めアルバイト生活をしながら何か出来ることがないか考えたところ、外国の友人や観光客等に安価で宿泊を提供できれば、田舎へ訪ねてくる機会が増えるのではないかというきっかけで2棟の戸建て式民宿を始めた。今年1月には中国家庭料理のレストランもオープンした。

定住者から移住者になるためには、行政の支援や受け入れのしくみづくりやサポート体制等の充実が必要と感じている。

また、田舎での生活は働くだけでなく、多様な活動、人と人とのつながり、交流、助け合いが重要であると感じている。

大台町観光協会 岡本 雄大氏

Iターン者はライフスタイルを重視しキャリアを捨てて来ているが、理想はうまくいかないことが多い。所詮は人と人との繋がりが重要で、システムではカバーできない。

大台町へ移住して「みやがわ森選組」で活動を行っているが、メンバーはIターンの人が多い。Iターン者はこれまでのノウハウを活かしながら楽しみ、また、環境・生態系に対する意識が高いことから、地域の為に何かできないか、子ども達に何ができるか、自分たちがどこまでできるかという志を高く持って活動を行っている。

4 質疑応答

○ 色川地域の獣害対策はどのようにされているか。

猪、鹿は電柵ネット等で自主防衛を行っているが、効果はあまりない。猿については深刻な問題となっている。大きな檻を作って猿の捕獲を計画している。

○ 10年後の姿をどのように考えるべきか。

移住してきた人も年齢が上がってくる。その地に生まれそこで死ぬという流れをつくるべきではないかと考えていることから、一人になっても周りで助け合えるシステムを地域でつくっていきたいと考えている。

今後のあるべき姿については、まず、一生懸命課題に向かって取り組んでいくことが大事であると思う。

- 山里の未来研究会は将来どうなるのか。

松阪市の約半分が過疎・辺地地域であることから、未来は山里にあると考えれば未来があるのではないかと考えている。

- 有意義なフォーラムであった。地域が限界集落に向かっているという意識を地域住民があまり持っていないので、将来の対策を考えていく良い機会となった。

- 梅川氏からのコメント

Iターン者と地域住民とのコミュニティづくりが大切で、人間の価値観の転換をうまく受け入れ、自分たちの地域の課題を考えて課題を解決していく自立した地域が地域活性化の要因となっているのではないかと。